様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６４５

研究課題名（和文）古代日本語の訓詁と表記体の研究

研究課題名（英文）The Study of Notation Style and Vocabulary in Ancient Japanese

研究代表者
佐野　宏（SANO, HIROSHI）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：５０３５２２２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：漢字原音に依拠して字音声調でアクセントまで書き分ける仮借表記と、和読の「字音語」に依拠する仮名表記の間には懸隔がある。漢字という文字は共通するが、いかにして漢語は日本語に言葉として移植され、漢字はなぜ仮名になったのかという問題は日本語表記史上の最大の問題である。日本語音韻史における上代特殊仮名遣が事実仮借表記として厳然と実在する一方で、原音から切り離された「語の表記体」における仮名遣いでもあったなら、「上代特殊仮名遣」は仮借と仮名の位相をもつ「語の表記体の集合」として位置づけられることなる。上代特殊仮名遣の表記論的証明に向けて、訓詁と語彙、表記体の相関を総合的に捉えて上述のような見通しを得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
上代語の訓詁と表記体の関係を考察する上で、万葉集の和歌本文に用いられた字音語をどのように訓読するかという問題がある。従来からも個々の字音語が和読による訓字（日本語化）であることの指摘はあるが、体系的に捉えた場合、恐らく漢語の訓読は倭訓と倭音（和読）がともに訓字表記として語の表記体を形成しており、その仮借運用（音声面を借りる）によって借音・借訓の仮名が形成されていることが分かった。その上で、日本語の清濁表記（濁音専用字）を漢字原音を根拠には実質的にできないことを再検証した。その結果、上代特殊仮名遣は仮借表記の側面と仮名表記の側面とがあり、それらが混在した「語の表記体」の集合であることが判明した。

研究成果の概要（英文）：Although KASHA notation “仮借表記”, which is based on the original Chinese pronunciation of Chinese characters (漢字原音), and KANA notation “仮名表記”, which is a phonetic translation of Chinese characters into Japanese (和読字音語) are different, their scripts share the same constituent characters. There are still questions among researchers of ancient Japanese as to how Chinese words were transplanted into Japanese vocabulary and by what process Chinese characters became Japanese characters. We found that "ancient Japanese special kana orthography"（上代特殊仮名遣） in Japanese phonological history is a complex of rules based on the original Chinese character pronunciation and a different set of general rules for the use of kana concerning the written form of Japanese words. This point shows that the "上代特殊仮名遣" has aspects of a "style of notation" combining KASHA characters “仮借表記” and KANA characters “仮名表記”.

研究分野：日本語学

キーワード：字音語　表記体　清濁　借訓仮名　借音仮名　語構成　訓詁　上代特殊仮名遣

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

8 世紀を中心とする古代日本語の文字・表記研究は出土木簡の表記分析を一つの契機として 90 年代後半から大きな発展を遂げた。その中で最も重要な発見は、今野真二（2001『仮名表記論攷』）、乾善彦（2017『日本語書記用文体の成立基盤』）らが、かつて浜田敦（1961「表記論の諸問題」『国語国文』30 巻 3 号）が指摘した「表記体」を「文体」と相対する形で再提起したことは、文字の選択からなる表記の様式を対象化する上で画期的な出来事であった。

「ある言語内容を文字によって写像する行為が「書記」であり、その結果として「表記」があるとしよう。その場合、「表記」は、文字についての知識と共に、それを読む（読解）行為を介してその言語内容を表し得る。これは、いわゆる書く行為（書記行為）と、それに対応する読む行為（読解行為）とを「表記」を介して並行させたものである」（佐野宏（2006）「書記論と表記論との発想の違いは何か」（『国文学』学燈社、第 51 巻 4 号）。書記行為と読解行為の中に表記を捉える場合、文字は表記の構成要素であるが、実体としての文字はそれを取り出すことが実はできない。文字は書記と読解の行為の中にしか現れず、それ単体としては点と線からなる文様でしかない。文字という認識は表記の構成要素としてのみ成り立っている。つまり、「表記を構成する最小単位は文字であるが、音韻が具体的な音声の抽象としてあることと同様に、文字もまた表記を通した抽象としてのみ存在している。文字として認められるということは、それを表記として措定することの中に含まれているといってよい。つまり、文体様式に対する了解が表記を拘束し、その限りで生じた表記の属性が、それを構成する文字の属性を拘束するという関係にある」（佐野宏（2007）「「歌」を書くための条件について」（『國語と國文学』第 84 巻 11 号）。たとえば、土器片に墨書された文様を漢字の「田」だという判断は、その文様を文字として捉える以前に、表記として措定したことと同時的だから、文字だという認識は、土器片の墨書に与えられた文体様式（書記法：種々の書式を含めた表記の場）とともに、〈ことば〉と文字との対応（表記法）をあてがうことで「田」という漢字が抽出されるのである。表記の場や文体については佐野宏（2007）「倭文体の背景について」（『国語文字史の研究』10）に述べた通りだが、個別の文字選択による用字法や、自由な文字選択を規制する表記法が相互に運用できる場がなければ、そもそも表記を「書く」ことも「読む」こともできないから、書記言語に潜在的に必ず存在する文体の枠組みとして、口頭言語の言語場に類比的な表記の場を想定している。

本来、漢文体といい、倭文体という、文体の枠組みは表記の如何に関わらない「表記の場」のことであるから、訓読環境下にあれば、書記行為上は中国語文でも、読解行為上は日本語文という倭文体を構成する。表記体名として変体漢文というのはその表記特徴に対する名称であって、上記にいう文体の名称ではない。倭文体は毛利正守氏の提唱に始まるが、そもそも表記体で分類できる概念ではなく、潜在的日本語文の生成過程を捉えたときに必要な理論概念であって、毛利氏自身もそのように論述している。中国語の表記法に依拠した書記行為による表記から、日本語での訓読という読解行為に依拠した表記へと展開する日本語文の形成は、潜在的日本語文による表記体の制御を想定する必要がある（「「倭文体」の背景」）から、漢文体（中国語文の文体様式）だけでは説明できないために、古代朝鮮語を含めた非漢文体にあって、日本語訓読文の限定を付したものを倭文体というのであって、朝鮮半島での句吐や吏読によるそれらは朝鮮語訓読文であるから韓文体と称することができるという見立てからの名称である。漢字文化圏の表記の場として、漢文体、韓文体、倭文体が東アジアにはあり得て、倭文体の日本語文は訓読という読解行為が表記を制御する方向へと発達を遂げたと考えられるからである。最初から漢文体から離脱する方向に進んでおり、これに即した表記体の分化が観察されるものと考えられる。

およそ文字・表記の大きな研究史的潮流として二つの流れがある。第一に、表記の構成要素である「文字」を中心に、文字によって生成される表記という捉え方がある。いわゆる文字論や文字史という枠組みである。第二に、上述の今野氏と乾氏によって提唱され、本課題での佐野宏・尾山慎らが考えるような書記と読解の行為の中で生成される表記と表記体の中で、構成要素である文字をも表記体として捉える表記論の枠組みである。この二つの潮流はいずれかが正しいとか新旧というのではない。御幣を恐れずにいえば前者が原子論・Atomic 論的な見方であるのに対して、後者が全体論・Style 論的な見方であるだけで、いずれも等しく現象の補足が可能である。結果的に用語の不統一がなお解消されない要因の一つでもあるが、しかし、表記体の設定によって歴史書記言語の記述をより立体的に描けるようになった。表記の内部構造、階層性、各階層の制御規則の優劣等々は、文字による一元論では十分に説明しづらい部分もあった。紙幅の都合で割愛するが「文体」を最後まで用いなかった小松英雄氏の書き手主体の行為論からみた書記行為の原理追求があればこそとはいえ、比喩的には static な文字から vivid な表記へと展開したことは事実である。加えて杉本つとむ氏が今日の「表記体」概念にもっとも肉迫した文字論者であることも看過できないが、いずれにしても、文字論と表記論の両方の方法を得た現代の我々からすれば、古代日本語の書記言語はなお未踏領域が多く残る研究対象である。

本研究では上記のような現状認識を共有して、次のような課題を考察することにした。

ａ　表記体概念の導入は、それまでの表語か表音かという文字属性がそのまま表記属性でもあった見方から、表語と表音が表記様式として相対的で選択可能な種別であることを示唆した。ここには出土木簡等による前提の見直しと、「万葉仮名」をめぐる漢字の用法から専用字へという

仮名成立過程への観点が大きく関与している。仮名に関する理論研究が進展する中で、奥田俊博（2016『古代日本語における文字表現の展開』）は漢字の用法としての訓字表記から日本語表記の専用字としての訓字へという過程を想定した分析が試みられている。正確な訓詁を用いた訓字分析によって、漢語の正用を規範と見た場合にそこから外れる訓字表記の一群を抽出し、そのずれと揺らぎの中に日本語の訓字の形成を捉えようとするものである。しかし、奥田（2016）が提示するモデルと並行的に表記体概念を導入して、日本語語彙のより標準的な意味用法を規準とした漢語語彙の包摂という観点にたてば、今ひとつの訓字専用字の形成が観察される可能性がある。

ｂ　表記体と用字法制限：漢語か倭語か、訓字か仮名かといった表記様式が選択できる背景を問い直す中で、文体が語彙特徴によって記述できるように、表記体を決定する用字特徴によって分析できる可能性が試みられている（尾山慎（2019『二合仮名の研究』 ）、佐野宏（2015「萬葉集における表記体と用字法について」『国語国文』84 巻 4 号）が指摘するように用字選択に掛かる制限から表記体記述の一つの鍵になっている。表記体が選択可能だということは、表記体を構成する文字に選択可能性があるということでもある。漢字の用法から専用字への限定という見方に倣えば次のようなことが考えられる。該当字の文字群から無制限に文字を選択できるという作業仮説を設ければ、その用字法に制限が掛かったことで表記体が形成されると捉えることができる。その制限の内実を記述できれば、表記体の目的性を明らかにすることに繋がる。この方法は語義を捨象した仮名の成立を分析する場合のものだが、用字法制限という観点は訓字にも有効であると考えられる。

ｃ　訓字の諸問題 文体と表記体を結ぶもの：表記を様式として捉える視点が文学作品の訓詁注釈に有効であることについては、日本書紀・古事記研究において瀬間正之（2015『記紀の表記と文字表現』）が指摘するように「文字表現」という枠組みが提唱され、すでに作品論あるいは広義の文体論に通底する研究がある。前掲の奥田（2016）が、漢語語彙と倭語語彙の意味範疇の重なりとずれから、漢語規準で定点観測によって確実に翻訳された訓字群を析出しようと試みている。これは見方を変えれば、文体特徴を記述できる訓字群を探索する基礎研究として重要である。 文体と表記体が連続的になるのは訓字表記においてである。表音的な仮名表記と表語的な訓字表記はいずれも表記体ではあるが、訓字表記は、日本語を漢語の翻訳を介して表す点で、日本語の表語表記であるとともに漢語の表意表記でもある。この漢語が視覚的に表意として働くところに語彙特徴を付帯する。つまり、日本語に対して選択された漢語という点で表記体上の用字特徴と文体上の語彙特徴が重なるため、表記体と文体の接点が生じる。文体を外形的に捉えるならば、倭文体のように訓読上にある潜在的日本語文ではなく、読み方がそのまま顕在する仮名表記文を待たなければならない。前掲乾（2017）が仮名の出現をもってはじめて日本語の文体が形成されるという見立ては、表記体即文体という意味では正鵠を射たものである。その上で、意味的文体を考える場合には瀬間（2015）奥田（2016）が示すところの漢語語彙との関係性と、いわゆる「正訓表記」の形成をどのように記述できるかが問題になる。

以上のａ、ｂ、ｃを代表者と分担者の共通の問題点として、上代語の語構成研究、語彙研究、表記研究、文字研究を行った。

２．研究の目的

本研究の目的は、上代語を中心とした古代日本語の解明にあるが、とくに漢語から倭語への展開を捉え、どのように倭語化するのかという点に力点を置いて考察を試みることにした。

佐野宏は、以前、仮名（真仮名・万葉仮名）を定位する際に、「仮名はその漢字に対する読み方をただ一つに限定したものである」と述べたことがある（前掲佐野 2015「萬葉集における表記体と用字法について」）。これは作業仮説だが、表記体が用字法制限の集束によって記述できることを示す中で見出したものである。すなわち、仮名表記が漢字の用法上の仮借表記と同質で、その都度漢字音を参照しつつ無制限に表音表記を試みれば、離散的な表記体が形成されるはずだが、実際には頻用される固定的な表記体が観察される。これは語の表記体として二次的表語性を獲得する中で固定的になったものと考えられる。語の表記体というまとまりの中で漢字は読み方がただ一つに限定される。すなわち表語的な表記体において仮名が発達するというモデルであり、表音的で表語的な固有名詞表記から仮名が成立したとする見方をさらに拡張したものである。

本研究では、果たして倭文体の仮名は漢文体の仮借とどのような関係にあるのかという点に迫る上で、訓字表記のあり方にも注目する。それは漢語のまま日本語化・倭語化するような語群を含めて、借音仮名というのは何を借りたのかという点を明らかにしてみたい。凡そ、日本語表記史上にあって「仮名の成立」はその根幹をなす大きな課題だが、後世の仮名文成立の萌芽が 8 世紀の上代語表記に観察できることを示してみたい。

３．研究の方法

方法１）訓字表記の二次的表語性：訓字表記と仮名表記がいずれも表記体であるとすれば、同訓異字の数だけ訓字表記があり得る。その中で訓字表記の二次的表語性を検証する。いわゆる正訓字という概念は、戯書の認定と同様で、読み手を通してみた仮想される書き手の意識から措定されるものであるから、8 世紀の共時的な用字認識を求めることは原理的にできない。また現存資料群の用例度数が必ずしもそれを反映するわけではない。けれども、単語ごとの訓字表記がどの

程度の使用度数と異なり表記があるのかは確かめておく必要がある。上代語の全ての語彙の表記体を確かめることが望ましいが現実的ではない。そこで『時代別国語大辞典』『分類語彙表』を用いて、複数の作品に跨がって使用される基本語彙を中心に検証語彙を選別し、その表記体を分析する。その際、名詞・形容詞・動詞・副詞といった品詞毎に 10 語を目安として析出してその表記体を上代文献及び関連資料類から摘出し調査する。R2 年度は、上述の観点から主として訓字表記を調査するが、同一語・形態素の仮名表記もあわせて調査する。このことで上代語資料群から同一語の表記体一覧とその使用度数が示される。語彙の特性に応じてそれぞれの数語を分担者と割り振る。R3 年度は、訓点資料についての同一表記体検索を中心に確認できる文献においての悉皆調査を行う。この過程で、訓点資料や出土木簡類については、研究機関及び所蔵機関に出向いて閲覧を行うことがある。
方法２）語彙と表記の対照：R4 年度は前述「方法１）」の成果をもとに義訓表記について分析を試みる。より頻用され固定的な訓字表記に対して同訓の異字もしくは訓字異表記は義訓と称されもするが、それらが漢語語彙の範疇であるのか、日本語語彙からの類推によるものであるのかの判別を試みる。つまり、義訓表記が典拠語彙である場合と、倭語での衒学的な翻訳造語である場合とに分けられるかどうかの検証を行う。このためには漢語語彙との訓詁と日本語の語彙史分析、さらには用字特徴についての表記体分析の総合が必要になる。　その上で、上代語語彙の訓字表記体一覧構築を試みる。これは上代語表記体分類表というのに等しいが、日本語を項目として標準的な表記体を通覧できれば同時代の仮想的な正訓字を析出できる可能性があるとともに、古事記、日本書紀、万葉集、風土記、宣命、行政文書出土木簡資料類といった資料間での同一語彙の表記体を対照することで表記体を比較することで、作品の文体特徴を記述できる可能性がある。

４．研究成果
　covid-19 の影響から進捗に種々影響が生じたので期間延長を申請した。したがって、ここでは年次別の報告内容を掲載する。

令和 2 年度実績：covid-19 の影響から進捗に遅れが出たために、Zoom や slack などオンライン会議のツールを活用し、計画を一部変更して対応した。今期は特に万葉集の表記体分析を中心としつつ、語彙研究、万葉集歌の解釈研究で成果を得た。表記体分野については、なお本文異同などを考慮する必要もあるけれども、概ね次のような見通しを得ることができた。語としての使用例が 500 例を超える基本語彙を中心にその表記を観察すると、その語を表す訓字が固定的で、なおかつ仮名表記の文字列においても頻用の表記体がいずれの語についても存在することが改めて確認された。経験的にも先行研究でも我々の観点とは異なるが、断片的に指摘されてきていたことではあるが、たとえば、万葉集では「いも（妹）」（妹山、妹背山を除く）は全 690 例中、妹 553、伊毛 73、*和伎毛 16、伊母 33、*和伎母 8、異母 1、移母 1、以母 1、方言形 4（数字は用例数）、「はな（花）」は全 467 例中、花 359、波奈 91、婆奈 9（々々1 例）、婆那 1、波那 2、半奈 1、伴奈１、播奈 2、芳奈 1 とある。仮名表記例を縦軸に使用度数、横軸にその序列を一位から順にならべると頻度第一位の表記体が全体の 50%以上を占め、三位以下は散発的で稀な出現に留まる。「花」を表す「は・な」の二音節語は各音節に対応する字母のいずれを自由に選択したとしてもその音節列を表示する上では問題がない。自由な用字選択が行われるなら、言語学的分布予想から出現順位と使用度数が Zipf 構造をもつことが考えられた（日本書紀歌謡はこちらか）。しかし、事実は予想に反していた。確かに各音節に常用の仮名字母があったと仮定することもできるが、常用という単音節仮名の汎用性は必ずしも機能性といえない点を考慮すれば、やはり仮名表記中にその文字列の機能負担、すなわち「語の表記体」としての二次的表語性を獲得している可能性を考えるべきものと思う。この調査過程で上代特殊仮名遣についての疑義が複数認められ、上代特殊仮名遣の再検証が急務であるという認識を共有した。

令和 3 年度実績：主として訓点資料（日本書紀古訓を含む）を中心とした訓詁による表記体分析（表記に対応する語彙と語構成の検討）を進めた。訓字表記の傾向を観察し、その固定性や典拠語のあり方を記述する中で思わぬ発見があった。たとえば、「沈」「鎮」はいずれもシヅムと訓じられるが語頭アクセントが異なり、シタ・シモ「下」の語構成とも相俟って「沈」と「鎮」のシヅムは語形成上、別語であるとみられる。この一連の検討の中で、アクセントの表示という観点から表記を観察する視点が得られた。万葉集では音節単位の変字法を含めても、語の仮名表記が二次的表語性を獲得する中で固定的な文字列による「語の表記体」を形成する傾向にある。その場合、アクセントと仮名字母選択が相関するか否かの検証が必要である。とくに日本書紀歌謡で確認できる「仮借」由来の借音仮名群、単音節の借訓仮名群がアクセントとの相関の有無の検証は計画にはなかったが、新視点として今期に得られた結果である。仮にアクセントに対応した仮名表記があれば、より「仮借」的であるといえようし、原音声母と無関係に清濁に両用するのはより「仮名」的であるということになる。加えて、日本書紀、古事記、萬葉集の「語の表記体」を観察すると、借音仮名にあって「妣」のように清濁仮名の両用例が散見される。「妣」は木下正俊（1965）「手火の清濁」（『萬葉』56）の指摘があるが、橋本四郎（1959）「「ことば」と「字音假名」―上代語の清濁を中心に―」（『萬葉』30 号）が指摘したように表語性との関わりから課題が多い。アクセントや清濁の表記は語の表記体中の「仮名」であることを示す点で、仮名の

用法から仮名の文字への転換の指標になるのかもしれない。

令和 4 年度実績：前年度の成果を受けて「字音仮名」についての検討を経て、「借音仮名」と「 字音語」の関係について表記論の観点から分析を試みた。とくに『萬葉集』の和歌本文に用いられた「漢語」は享受史上に和訓を施されることもあるが、律令用語、仏教用語（仏教由来の語彙群）は音読された字音語としての訓が付されることがある。「過所奈之尓」（万 3754）「五位乃冠」（万 3858）「波羅門乃」（万 3856）「塔尓莫依」（3828）の「過所」「五位」「波羅門」「塔」は字音語とみられるが、合拗音や撥音、入声音の類をどのように仮名表記するかという問題は後世の「字音仮名遣い」の課題にも似た問題を抱えている。尾山慎（2022）「万葉集における字音語とその認定を巡る方法論について」（第七十五回萬葉学会全国大会、発表要項、後に論文化）が指摘するように、萬葉集の享受史上は夙に井上通泰『萬葉集新考』が他に先駆ける形で積極的に字音語を採用しているが、歌詞中の字音語の扱いは揺れている。一方で、字音語が訓字として機能している点は和訓を伴う訓字と何ら変わりはなく、「絶塔浪尓（たゆたふなみに）」（万 1089）のように二合仮名での「塔」は事実上の訓仮名相当でもある。「漢語」と「字音語」はしばしば同義的に用いられるが、しかし、表記体としては字義の第一次表意性から訓字表記であって、いわばその仮借運用として借音仮名を位置づけることができる。訓字と仮名はそれぞれ表語と表音の、語と音節にわたる表記体に対する名称でもあるから、表記体から眺めた場合には借音仮名と借訓仮名はいずれも訓仮名であるとも見なしえる。漢語はその中国語語彙としての第一次表意性と、詩文に典拠を有する場合にはさらに文芸的位相を語彙論的に有するが、その意味喚起の階層性と、訓読を介して和語へと翻訳されるあり方、さらには字音語のまま和読されるあり方、この相互関係の解明が次なる課題である。

令和 5 年度実績：前年度に試みた万葉集にみられる「字音語」の訓をめぐる分析の成果をまとめる形で、今期は「字音語」「日本語の清濁表記」のあり方を集中的に検証した。その結果、字音語という場合には漢字原音による原語に近い音読と、日本語に音訳された音読み（和読）の二類があると考えられる。二合仮名や略音仮名の存在は「音訳された字音語（日本語）」の音声面を借りた借音仮名という枠組みがある。漢字の訓読には字音語として訓字となる音読みの語を含めるべきであり、原理的には借音仮名も借訓仮名相当であったことを意味する。従来の漢字原音に依拠した日本語の清濁の分析あるいは上代特殊仮名遣を含めて問題であるのは、漢字原音に依拠して字音声調でアクセントまで書き分ける仮借表記と、和読字音語に依拠する仮名表記の間には懸隔があるという点である。これは「漢字が共通する」だけでは乗り越えられない日本語表記史上の恐らく最大の課題である。漢語を基準にした「日本語の表記」と、日本語を基準にした仮名表記（母語の表記）という中で、清濁表記の決定が漢字原音からは検証できないという事実は、日本語表記における漢字がもつ属性の異なり（中国語か日本語か）を浮き彫りにしたといえる。日本語音韻史における上代特殊仮名遣が事実仮借表記として厳然と実在する一方で、原音から切り離された語の表記体として仮名表記としての仮名遣いでもあったなら、「上代特殊仮名遣」は仮借と仮名の位相をもつ「語の表記体の集合」として位置づけられることなる。加えて、上代語の訓詁から字音語が倭語化してゆくプロセスについても見通しが得られたが新たな課題も多く残された。とくにこれまで看過されてきた事象（たとえば甲乙両類の書き分けがない仮名と字母選択によるアクセント指標の関係など）への分析が急務であるとともに異なり字母数がとくに多い「シ」の仮名の位相（上記のそれ）についても究明が俟たれる。

　また「いわく、～といふ」と同様の「よめる、～とよむ」形式が和文に古くから定着しているが、記紀歌謡にもその方法がみとめられ、そこに漢文訓読の影響があるとみられる。さらに表記研究に「文字生活」という観点を導入すればどんな表記史が描けるか、漢字伝来から仮名成立までを素描することで、言語生活の位相を捉える必要があることについても一定の成果を得ている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 乾善彦	４．巻 15
２．論文標題 漢字を捨てられない日本語	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ことばと文字	６．最初と最後の頁 39～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 乾善彦	４．巻 12
２．論文標題 漢文訓読と和歌散文連接形式の展開	５．発行年 2023年
３．雑誌名 奥村佳代子編著『周縁資料と言語接触研究』(関西大学東西学術研究所研究叢書12)	６．最初と最後の頁 59～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 乾善彦	４．巻 107
２．論文標題 痩々亭骨皮道人著述・校閲等関係書目一覧（稿）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国文学	６．最初と最後の頁 220～234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蜂矢真郷	４．巻 42
２．論文標題 国語語構成研究に関する用語について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国語語彙史の研究	６．最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内田賢徳	4．巻 2
2．論文標題 歌と語り――巻十六の場	5．発行年 2023年
3．雑誌名 第18回若手研究者支援プログラム「萬葉集巻十六を読むⅡ」報告集	6．最初と最後の頁 25～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐野宏	4．巻 2
2．論文標題 「字音語」と仮名	5．発行年 2023年
3．雑誌名 第18回若手研究者支援プログラム「萬葉集巻十六を読むⅡ」報告集	6．最初と最後の頁 1～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 24
2．論文標題 上代文献における文字論・表記論的研究の方法と課題	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本文化研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 67～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蜂矢真郷	4．巻 40
2．論文標題 名詞・動詞の被覆形と形容詞の語基	5．発行年 2021年
3．雑誌名 萬葉集研究	6．最初と最後の頁 64-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乾善彦	4．巻 41
2．論文標題 かぐや姫はなぜ「読み書き」ができたのか―「手習」と和歌をかくこと―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蜂矢真郷	4．巻 41
2．論文標題 動詞マフ［転・舞］・マク［巻］・マグ［曲］	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蜂矢真郷	4．巻 40
2．論文標題 接尾辞ガルを伴う動詞	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐野宏	4．巻 60
2．論文標題 雄略天皇御製歌――文脈付帯語の形成について――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古代文学	6．最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蜂矢真郷	4．巻 40
2．論文標題 名詞・動詞の被覆形と形容詞の語基	5．発行年 2021年
3．雑誌名 萬葉集研究	6．最初と最後の頁 pp237-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乾善彦	4．巻 193
2．論文標題 澤崎文『古代日本語における万葉仮名表記の研究』をよむ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国文学研究（早稲田大学）	6．最初と最後の頁 pp153-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 231
2．論文標題 書評　澤崎文著『古代日本語における万葉仮名表記の研究』pp74-88）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 萬葉	6．最初と最後の頁 pp74-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蜂矢真郷	4．巻 231
2．論文標題 上代を中心とするバ行動詞とマ行動詞	5．発行年 2021年
3．雑誌名 萬葉	6．最初と最後の頁 pp1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐野宏	4．巻 48
2．論文標題 「字音語」についての覚書	5．発行年 2023年
3．雑誌名 京都大学國文学論叢	6．最初と最後の頁 79-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐野宏	4．巻 II
2．論文標題 「字音語」と仮名	5．発行年 2023年
3．雑誌名 萬葉集巻十六を読む II（第18回若手研究者支援プログラム報告集）	6．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 46
2．論文標題 萬葉集の清濁表記論再考	5．発行年 2024年
3．雑誌名 萬葉集研究	6．最初と最後の頁 195-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 108
2．論文標題 古代日本語の清濁と訓仮名――萬葉集の表記論的研究にあたって――	5．発行年 2024年
3．雑誌名 美夫君志	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 236
2．論文標題 萬葉集における「字音語」とその認定を巡る方法について	5．発行年 2023年
3．雑誌名 萬葉	6．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 64
2．論文標題 分節される言葉、分節する文字――書くことで発見されることばとしくみ	5．発行年 2024年
3．雑誌名 文学史研究	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 尾山慎
2．発表標題 万葉集における字音語とその認定を巡る方法論について
3．学会等名 第七十五回萬葉学会全国大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 内田賢徳
2．発表標題 歌と語り――巻十六の場
3．学会等名 第 18 回「若手研究者支援プログラム」　（奈良女子大学古代学・聖地学研究センター）（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 佐野宏
２．発表標題 字音語と仮名
３．学会等名 第 18 回「若手研究者支援プログラム」 （奈良女子大学古代学・聖地学研究センター）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 蜂矢真郷
２．発表標題 上代における複合名詞の前項と後項
３．学会等名 2022年度京都大学国文学会・講演会（京都大学大学院文学研究科）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐野宏
２．発表標題 波羅門の作れる小田を食む鳥
３．学会等名 2022年度大阪市立大学国語国文学会・講演（大阪市立大学文学研究科：現、大阪公立大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐野　宏
２．発表標題 雄略天皇御製歌――文脈付帯語の形成について――
３．学会等名 古代文学会　2020シンポジウム・夏期セミナー「固有名」――コンテキストの結節点――（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

1．著者名 尾山 慎	4．発行年 2022年
2．出版社 花鳥社	5．総ページ数 336
3．書名 日本語の文字と表記	

1．著者名 尾山慎	4．発行年 2021年
2．出版社 花鳥社	5．総ページ数 356
3．書名 上代日本語表記論の構想	

1．著者名 蜂矢 真郷	4．発行年 2023年
2．出版社 塙書房	5．総ページ数 426
3．書名 国語語構成要素研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

三省堂　ワードワイド・ウェブ
https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/columncat/%E8%A8%80%E8%AA%9E/%E5%8F%A4%E4%BB%A3%E8%AA%9E

蜂矢真郷「シヅム［沈］とシヅム［鎮］―金田一法則から見る―（下）」（ことばのコラム「古代語のしるべ」10回［2022.3］）
蜂矢真郷「「シヅム［沈］とシヅム［鎮］―金田一法則から見る―（上）」（ことばのコラム「古代語のしるべ」9回［2022.2］）
蜂矢真郷「ソソロケシ［渋］」（ことばのコラム「古代語のしるべ」8回［2021.6］）
蜂矢真郷「イスロコフ ―イススク・ウススク・ウソソクと合わせて―」（ことばのコラム「古代語のしるべ」7回［2020.9］）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	蜂矢　真郷 (HACHIYA MASATO) (20156350)	大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・名誉教授 (14401)	
研究分担者	尾山　慎 (OYAMA SHIN) (20535116)	奈良女子大学・人文科学系・准教授 (14602)	
研究分担者	乾　善彦 (INUI YOSHIHIKO) (30193569)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	内田　賢徳 (UCHIDA MASANORI) (90122142)	京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関